

## 西日本の風土記の丘から学ぶ 鹿児島県の史跡・遺跡活用の活性化

大西 智和\*

### 1. はじめに

2019年4月に文化財保護法の一部を改正する法律が施行され、文化財の保護・保存から、観光資源といった活用への方向性が示された。もちろん、国民共有の資産である文化財を様々な形で活用することは必要なことではある。しかし、文化財（遺跡を含む）の活用には、文化財の保護が必須の条件となる。そのような視点に基づいて、令和2～3年度までの鹿児島国際大学附置地域総合研究所の共同研究プロジェクトでは、鹿児島県の文化財を対象としてその保護と活用を図った、持続可能な観光資源としての活用方法を模索する研究を進めた。

研究の実施にあたって、遺跡の保存活用において先駆的な取り組みを実践してきた、風土記の丘のうち西日本に所在するものを訪れ、実践事例を調査した。本稿では訪れた風土記の丘の紹介と、そこで得られた、鹿児島県の遺跡や史跡といった文化財活用の活性化に有用であると考えたことについて述べてみたい。

### 2. 風土記の丘

風土記の丘は、文化庁が昭和41（1966）年に発表した風土記の丘設置構想に基づいて、遺跡と歴史資料の保存及び活用を目的として設置された、遺跡を中心とした施設である。遺跡を広域に保存するとともに、歴史・考古・民俗資料を収蔵・展示する資料館を設置して、遺跡と資料を一体的に保存・活用することが図られている。風土記の丘第1号となったのは、宮崎県の「西都原風土記の丘」で1966年のことであった。以後、開設が進んだが、当初の事業は平成6（1994）年をもって終了している。その後も開設は続き、2007年には全国で16か所を数えるまでになった。風土記の丘に関しては、安原（1969・1976・1979）、鈴木（1976）、高橋（1981）、文化庁文化財保護部記念物課（1987）が成立・整備進行時期において、風土記の丘の理念や整備が進む風土記の丘の概要、問題点などについて述べている。また、風土記の丘事業終了後のものとしては小笠原（2008）、青木（2014）、関（2014）などの研究がある。小笠原（2008）は風土記の丘が果たしてきた役割の再評価を行うとともに、今後の課題についても述べ、今日的な条件を踏まえて風土記の丘の開設を進めるべきと述べている。青木（2014）は史跡整備に博物館の必要性を主張した先学の遺跡保護思想や、先行研究者の博物館像をまとめたうえで、風土記の丘の理念の有効性を主張している。関（2014）は風土記の丘構想の歴史的経緯を概観し、各地の風土記の丘の現況を踏まえて、学ぶべき点を多面的に論じている。風土記の丘の事業の終了後も、周辺遺跡と博物館とが有機的に組み合った遺跡活用の在り方は、総じて有効なものとして評価されていると言える。

---

キーワード：風土記の丘、文化財、遺跡、史跡、活性化

\* 本学国際文化学部教授

### 3. 訪れた風土記の丘

西日本各地の風土記の丘および風土記の丘を前身とする施設を訪れた。以下に概要や訪れた際の印象を述べたい。なお、訪れたのは2020~21年にかけてで、新型コロナウイルスの感染拡大時期と重なっていたこともあり、風土記の丘内の一部が閉鎖されているなどで利用できない施設もあった。また、できるだけ時間をかけて見学するよう努めたが、時間の制約で見られなかったり、見学に十分な時間を割けなかったりした文化財や施設もあった。事実関係に誤りなどがある場合は、すべて筆者の責任である。

#### 3.1 富山県 [立山博物館]<sup>1</sup>

富山県 [立山博物館] は、立山の歴史と立山信仰、そしてその舞台となった自然を紹介している。総面積約13ヘクタールの広大な敷地の中に展示館、遙望館、まんだら遊苑、布橋、教算坊をはじめとする施設が点在する広域分散型博物館である(図1)。昭和47(1972)年4月に発足した「立山風土記の丘」をベースに、その後の社会的要請に対応して発展的に博物館として再構築し、平成3(1991)年11月に開館した。なお、現在は「風土記の丘」の名称は用いられていない。

博物館は三つのエリアに分かれている。教界には展示館のほかに、旧宿坊の教算坊があり、平成25年7月には、山岳文化に関する資料を収蔵・展示する山岳集古未来館が開館した。聖界にはメイン施設として遙望館があり、立山信仰の舞台や世界に関する映像を3面の大型スクリーンで観ることができる。また、女人救済の儀式「ぬのばし布橋灌頂会」の舞台となった布橋うぼどうと嬬堂うぼどうの基壇などもある。遊界にはメイン施設として、まんだら遊苑があり、五感で立山信仰の世界を体感できる。他に、嶋家(国指定重要文化財)、善道坊(旧宿坊・移転復元)、有馬家(立山町指定文化財)等の歴史的建造物、国指定の特別天然記念物のニホンカモシカを飼育する「かもしか園」などがある。

広大な敷地一といっても歩いて回るにはちょうど良いと思われる広さをいくつかのテーマで分けて、そのエリアごとに博物館やそれに類する施設が配されている。案内板も多く設置されていて、各施設を訪れることは容易だった。市街地からはかなり離れたところに位置しているが、最寄りの富山地方鉄道千垣駅との間は、バスが列車の時刻に合わせて運行されていたので、公共交通機関利用でもアクセスの不便は感じられなかった。

#### 3.2 近江風土記の丘<sup>2</sup>

近江風土記の丘は特別史跡安土城跡をはじめ、史跡観音寺城跡、史跡瓢箪山古墳、史跡大中の湖南遺跡から構成されている。その中心的な施設として安土城考古博物館が設けられ、平成4(1992)年に滋賀県立安土城考古博物館として開館した。風土記の丘の史跡を紹介するとともに、それらの時代の歴史や文化を、その他の展示や解説を通して総合的に理解を深められるよう意図されている。あわせて城郭と考古を主なテーマとした展示、講座、講演会等の普及啓発事業も実施されている。また、城郭の調査研究や考古資料の調査、整理、復元の実施や成果の公開など、地域文化創造の拠点施設としての活動も行っている。

近江風土記の丘の構成遺跡は、城跡、古墳、遺跡とバラエティーに富んでいる。安土城は近江風土記の中心的な史跡と考えられ、スケールは想像していたよりも大きく、城跡への上りがいがあった(図2)。観音寺城跡は山城ということで、時間の制約から見学することはできなかったのが残念であった。

安土駅の前には、安土城郭資料館があり、20分の1の天守閣模型が展示され、詳細に復元された内部も見

1 <https://www.pref.toyama.jp/1739/miryokukankou/bunka/bunkazai/home/index.html> (2022年7月25日閲覧) を参照した。

2 [https://azuchi-museum.or.jp/sp\\_about](https://azuchi-museum.or.jp/sp_about) (2023年1月27日閲覧) を参照した。また、全国風土記の丘協議会(2018)も参照した。以下の風土記の丘についても同様であるが吉備路風土記の丘は除く。

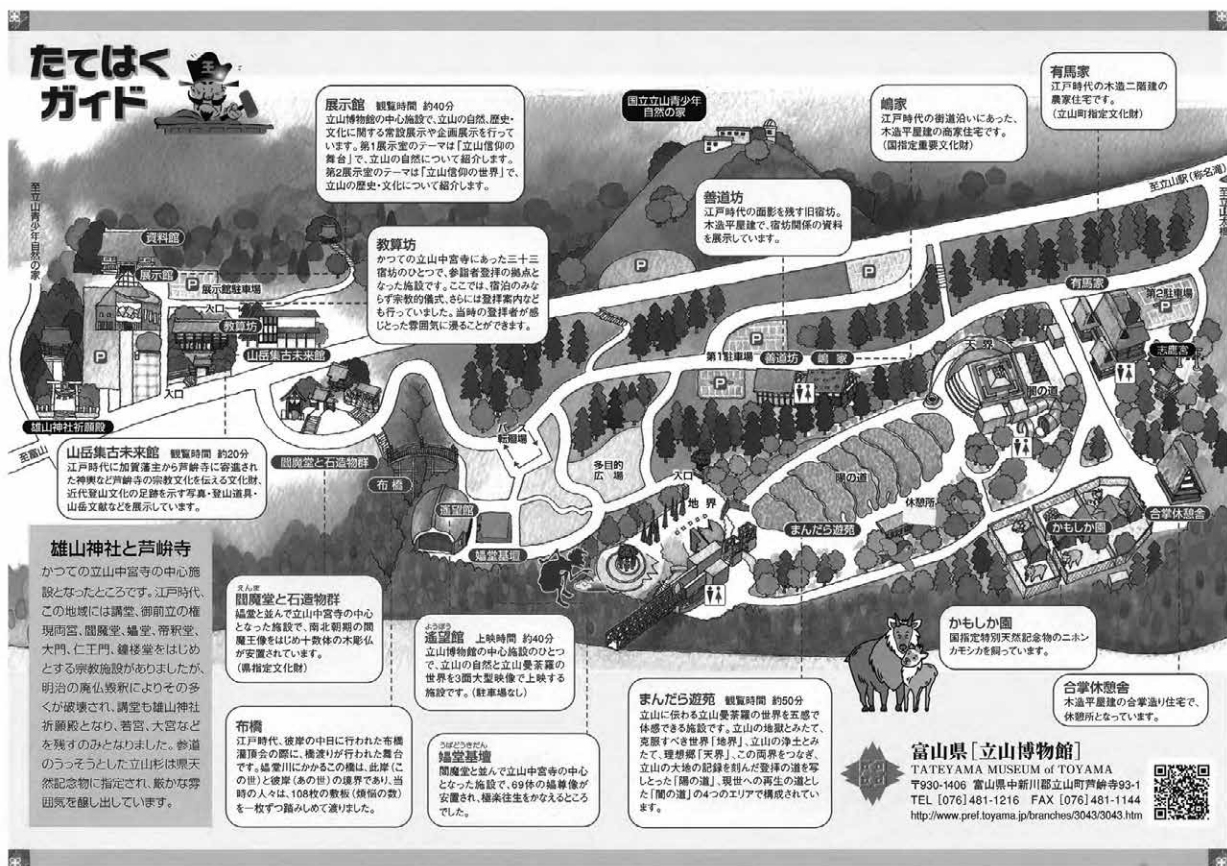


図1 立山博物館ガイドマップ  
(注1よりダウンロード)

学できるようになっていて、興味深かった。安土城跡の麓には近江八幡市特別史跡安土城跡ガイダンス施設もあり、安土城の模型や出土遺物、映像資料などを見ることができる。

風土記の丘を構成する博物館は、安土城考古博物館であるが、このようにいくつかの博物館的施設がバランスよく点在しており、史跡を訪ねるうえで便利であると感じた。

### 3.3 近つ飛鳥風土記の丘<sup>3</sup>

近つ飛鳥風土記の丘は大規模な群集墳である「一須賀古墳群」を保存し、文化財に触れ、学び、親しむ場として設置された史跡公園である。敷地は29ヘクタールあり、その中に102基の古墳が保存されている(図3)。なお、整備されているのはそのうちの40基である。

大阪府立近つ飛鳥博物館は風土記の丘の核となる施設で、1994年に開館した。博物館のテーマは古代の国際交流と国家の形成過程である。展示は一須賀古墳群の出土品にとどまらず、大阪府全体の古墳時代から古代にかけての資料が広く展示されている。



図2 安土城の石垣

3 <http://www.chikatsu-asuka.jp/?s=fudoki> (2023年1月28日閲覧) を参照した。

大阪の中心部からは電車やバスを乗り継いで向かったが、交通の便は良い。博物館の展示は古墳文化全体に重点が置かれ、風土記の丘のガイド的な役割はあまり感じられないように思われた。展示品は間近に見られるものも多くて、全体的に見やすい。また、近隣の小学生が制作した埴輪が展示されるなど、学校との連携もうかがえた。

展示の見学後、古墳群を散策した。横穴式石室を埋葬施設とする古墳が多いため、見ごたえはあるが、中にはかなり大きく破壊されてしまっていて、わかりにくいものもあった。また、博物館から離れた古墳には案内板の設置が少ないようで、博物館から遠い場所の遺跡の見学の便はやや良くないように感じた。展望台も整備されているが、草木が繁茂し、少し視界が遮られていた。広い風土記の丘のエリア全体を、良い状態に維持することは難しいことかもしれない。

### 3.4 紀伊風土記の丘<sup>4</sup>

和歌山県立紀伊風土記の丘は、国の特別史跡、「岩橋千塚古墳群」の保全と公開を目的として昭和46（1971）年8月に開園した（図4）。和歌山県には約1,500基の古墳が知られるが、そのうちの半数以上が岩橋千塚周辺に分布しており、風土記の丘園内には約430基の古墳が含まれている。また、大日山35号墳は、全長105mの規模を有する和歌山県内最大級の前方後円墳で、10数基の古墳の埋葬施設（横穴式石室、竪穴式石室、箱式石棺）も公開されている。とくに、石棚・石梁を有する岩橋型横穴式石室は特徴的なものとして知られており、石室の天井が高いものもあって迫力を感じられる。

その中心的な施設として、紀伊風土記の丘資料館があり、岩橋千塚古墳の理解の役立つ資料ははじめ和歌山県内の資料が展示されている。とくに、大日山35号墳から出土した、翼を広げた鳥形埴輪や、両面人物埴輪といった他に例を見ない埴輪（重要文化財）は注目される。

園内には、約3kmの幹線園路と散策路が設けられ、解放されている。これらの道を通じて、古墳へのアクセスは容易である。

和歌山市中心部からバスを利用して訪れ、降車したのは風土記の丘の駐車場付近であった。駐車場がほぼ満車状態であることが気になった。うかがったところ、多くは園内のウォーキングに訪れた人々のものであるとのこと、とくに週末や休日は普通の光景であるようだ。実際に園内の古墳を見て回った際、多くのウォーキングを楽しむ人たちを見かけた。ウォーキングの場として遺跡が活用されていることを強く感じたのが、本風土記の丘であった。

園内を散策した際、前山 A58号墳の墳丘に配置された新しい埴輪が目に入った（図5）。内側に制作者と

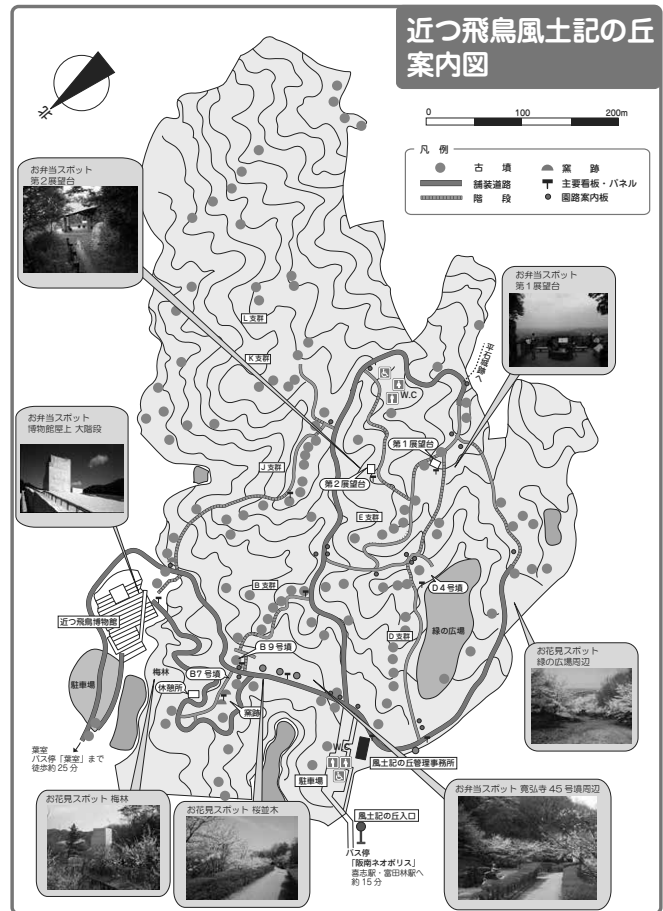


図3 近つ飛鳥風土記の丘案内図  
(注3よりダウンロード)

4 <https://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>（2023年1月29日閲覧）を参照した。



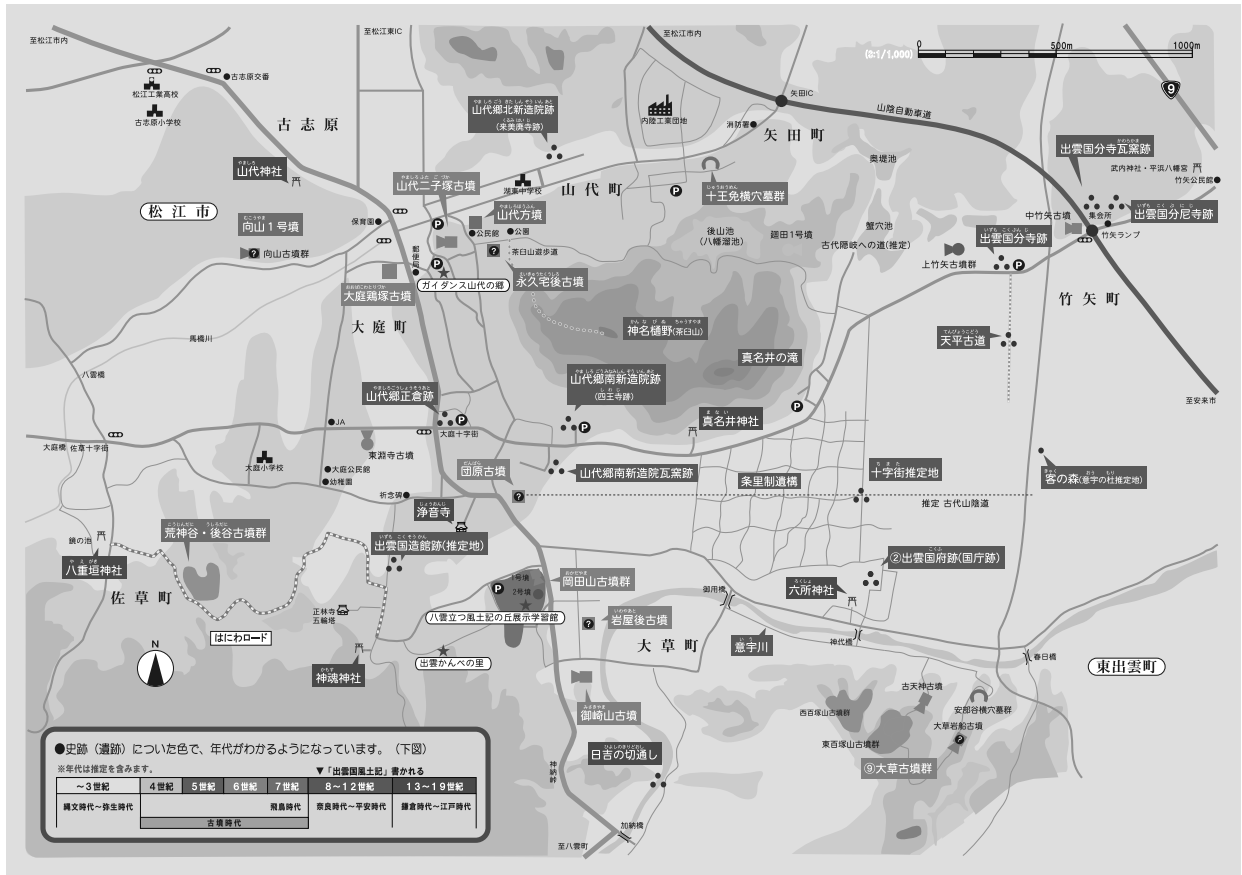


図6 八雲立つ風土記の丘史跡マップ  
(注5よりダウンロード)

内には、鳥根県最大の前方後方墳である山代二子塚古墳をはじめ、地域の特徴を有する古墳が種々分布する。また、奈良時代に設置された雲国庁・出雲国分寺、さらには出雲国造家ゆかりの神社や寺もあるなど、バラエティーに富んだ文化財によって構成されている（図6）。

中心的な施設となるのは、「展示学習館」で、風土記の丘地内の出土品や出雲国風土記写本などが展示されている。なかでも展示館すぐ近くに位置する岡田山1号墳出土「額田部臣」の銘文入り大刀や、松江市平ひら所ところ遺跡埴輪窯跡出土「見返りの鹿」埴輪は重要文化財に指定されている。

展示学習館近くに位置する風土記植物園では『出雲国風土記』に由来する植物約80種が育てられている。その他、エリア内には竪穴式住居、掘立柱建物、中世の土居といった復元施設があり、散策する市民や遊んでいる子どもの姿が見られた。

風土記の丘を構成する文化財は、岡田山古墳群を除くと、展示学習館からは離れて位置している。そこで便利だと思われたのが、無料で借りることができるレンタサイクルであった。また、訪れた史跡で説明を聞くことができる音声ガイドも無料で借りられる。

山城二子塚古墳の近くには、「ガイダンス山代の郷」がある。施設内には山代二子塚古墳の解説ビデオが放映される映写室、向山1号墳の石棺式石室の実物大模型などが設置されている。この施設は山代二子塚古墳のガイダンス施設であるとともに、周辺の遺跡や古墳を見学する際の拠点にもなっている。

展示館の展示を見学し、エリア内の岡田山古墳などを見た後、レンタサイクルと音声ガイドを借りて、風土記の丘内の史跡を訪れた。マップに記された遺跡や史跡のうちの10カ所については、訪れたら「フドキのカード」をいただけるということだった。オリジナルのカードに魅力を感じ、これら10カ所も含めて見学した（図7）。案内板が適切に設けられていてわかりやすかったが、ずいぶんと山を登らないと行きつ



図7 フドキのカード

かない古墳も含まれていた。この地域の古墳は、横穴式石室のものが多く、内部には大型の石棺が置かれたものもあるなど、見ごたえがあった。国府跡や国分寺など史跡としてよく整備されたものも多かった。

### 3.6 吉備路風土記の丘<sup>6</sup>

吉備路風土記の丘は昭和47（1972）年に風土記の丘の指定を受けた。園内には備中国分寺跡、備中国分尼寺跡、こうもり塚古墳、造山古墳などを含み、とくに備中国分寺跡は、田園風景の中に五重の塔がそびえ、吉備路のシンボルとなっている。また、造山古墳は5世紀前半につくられた全長360mの前方後円墳で、全国でも4番目の規模をほこる。墳丘に自由に立ち入ることができる古墳としては日本最大である。

博物館施設として昭和51（1976）年岡山県立吉備路郷土館が備中国分寺の近くに開館した。平成26年には、総社吉備路文化館として開館し、美術館としての趣が強くなったが、吉備路風土記の丘のガイダンスコーナーも設けられている。

また、造山古墳の近くには、「造山古墳ビジターセンター」が設けられており、造山古墳や、それを構成文化財のひとつとする日本遺産「桃太郎伝説の生まれたまち おかやま ～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～」や造山古墳周辺の観光情報を提供している。

ここで特筆されるのは、岡山市の岡山県総合グラウンドから総社市市役所入口交差点までの約22キロメートルの自転車・歩行者の専用道路である。よく整備されており、標識や表示もわかりやすい。このサイクリングロードは主要な史跡や遺跡を結んでいる（図8）。

6 <https://www.pref.okayama.jp/page/573437.html>（2023年1月26日参照）を参照した。





しながら、調査が実施されていない古墳が多いこともあり、内部の様子を見学できない古墳がほとんどであることは、少し物足りなく感じられるかもしれない。遊歩道が整備され、メインの遊歩道は起伏もそれほどなくて歩きやすい。散策を楽しむ人たちも比較的多かった。古墳名を示す表示板がわずかであるが取れたりしているところは気になったが、全体的に整備も良く行き届いていた。博物館と遺跡や文化財がコンパクトにまとまった利用しやすい施設であると思った。

### 3.8 宇佐風土記の丘

宇佐風土記の丘は、国の史跡に指定されている川部・高森古墳群を中心とした総面積約19ヘクタールの史跡公園で、九州最古級の前方後円墳である赤塚古墳をはじめとする6基の前方後円墳や、その他の古墳群からなっている。その中心的な施設は、大分県立歴史博物館で、昭和56（1981）年に開設された、県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館を前身としている。平成10（1998）年には、さらなる文化財の保存・活用を目的に、展示内容の刷新、文化財の収蔵・保存スペースの拡充などをはかり、現在の名前としてリニューアルオープンした。博物館内には、風土記の丘内の古墳から出土した資料はもちろん、国指定特別史跡臼杵石仏の実物大複製模型や、国宝富貴寺<sup>ふきじ</sup>大堂の創建当時を復元した実物大模型なども展示されている。また、大分県の文化財保護研究センターとしての役割や学校との連携など、様々な活動を行っている。

博物館の見学後、風土記の丘を見学した。敷地が広いので、無料の自転車レンタルサービスがある。また、古墳の解説やAR・VRコンテンツがインストールされたタブレットの貸し出しも行ってた。今回は、タブレットを借り、歩いて風土記の丘を巡った。

市街地からそれほど離れていない立地や、運動施設も隣接しているなど、人が集まりやすい環境ではあるが、平日であったことや新型コロナウイルス感染拡大が収まらないなどのためか、遺跡を訪れている人は少なかった。

大分県立歴史博物館オリジナルフィギュアコレクションと銘打った、カプセルトイが販売されていたことは興味深かった。希少性が高く、興味がある人にとっては大きな魅力になると思った。また、園内には菖蒲や桜が多く植えられていて、花の時期になると市民の憩いの場となっているとのことである。

### 3.9 肥後古代の森<sup>8</sup>

肥後古代の森は、平成4（1992）年度に全国で11番目の風土記の丘として誕生した。もともとは、菊池川流域の山鹿市、鹿央町、菊水町（現和水町）の3地区を「肥後古代の森」として整備が進められ、その中核施設として熊本県立装飾古墳館が設置された。肥後古代の森の活用を目的として「肥後古代の森協議会」が発足し、現在は、山鹿地区、鹿央地区、菊水地区、菊鹿地区、菊池地区の5地区で様々な事業が展開されている。そのため、これらのエリアを総合すると非常に広範になる（図9）。

山鹿地区の拠点施設は、山鹿市立博物館である。国史跡方保田東原遺跡で出土した全国で唯一の石包丁形鉄器をはじめ貴重な資料が多く展示されている。エリア内にはチブサン古墳やオブサン古墳など有名な古墳が位置し、博物館からは「古代への道」が続いている。「古墳の森」には各地から移設された古墳が、「古代の森」には装飾横穴墓の装飾部分のレプリカが配置されていて、野外博物館としても楽しめる。

鹿央地区の拠点施設は、熊本県立装飾古墳館で、肥後古代の森の全体のガイダンス施設も兼ねており、各地域の古代の森の概要を説明するとともに、資料が展示されていた。熊本県内の主要な12の装飾古墳のレプリカは、間近で装飾を見られて見ごたえがある。エリア内には熊本県最大級の前方後円墳である岩原二子塚古墳をはじめとする古墳や岩原横穴墓群が位置する。また、駐車場の近くには物産館もあった。

8 <https://kofunkan.pref.kumamoto.jp/kodainomori/>（2023年1月29日閲覧）を参照した。



図9 肥後古代の森マップ（注7より）

(<https://mppf.or.jp/wpsys/wp-content/themes/mppf/docs/saito/parkMap.pdf> よりダウンロード)

菊水地区の拠点施設は、和水町歴史民俗資料館である。銀象嵌大刀で有名な江田船山古墳に隣接しており、江田船山古墳出土品のレプリカなどが展示されている。公園内には、江田船山古墳、虚空蔵塚、塚坊主古墳などのほか、肥後民家村が整備され、中には宿泊可能な民家もある。なお、歴史民俗資料館が休館中だったため、この地区の見学は見送った。

菊鹿地区の拠点施設は鞠智城跡の敷地内にある資料館「温故創生館」で、7世紀後半に築かれた古代山城鞠智城跡から出土した遺物や解説パネル、映像による説明などが行われている。また園内には八角形鼓楼や米倉、板倉などが復元されている。園内の歩道はよく整備されていて、散策を楽しむことができる。園内には物産館「長者館」もある。来場者は今回訪れた4カ所のうちではもっとも多かった。しかし、山城の全域を散策している人は少ないようだった。

菊池地区の拠点施設は、わいふ一番館である。菊池市内の遺跡から出土した資料や政界、財界、文化面で活躍した菊池出身者の資料も紹介されている。ここは地域ミュージアムという位置づけで、地域のことを知ってもらうことを意図していることが伝わってきた。ギャラリーは市民が集う場になっているようであった。

「肥後古代の森」を構成するエリアが広く、見どころとなる遺跡や史跡といった文化財の数も多いため、ゆっくり見学すると1日では回り切れない。貴重な文化財が多く見られるこれらの地域を有機的に結び付けて活用を図ることは、良い取り組みであると思うが、エリアが広域であり、含まれる文化財の種類も多いため、風土記の丘としてのまとまりに欠けてしまう点は否めないと思われた。

### 3.10 西都原風土記の丘<sup>9</sup>

特別史跡西都原古墳群は、宮崎県のほぼ中央、一ツ瀬川の右岸、西都市街地の西の通称「西都原台地」とその周辺の中間台地や沖積地にあり、その範囲は南北4.2km・東西2.6kmに及んでいる（図10）。指定面積は58ヘクタールを超える。西都原古墳群は、3世紀末から7世紀にかけて築造され、陵墓参考地の男狭穂塚・女狭穂塚を加えた319基もの古墳がある。なお、その内訳は、前方後円墳31基、方墳2基、円墳286基である。古墳の分布と築造年代等により10～13の小群に分けられる。また、古墳群には、南九州に特有の地

9 <https://saito-muse.pref.miyazaki.jp/web/index.html>（2023年1月29日閲覧）を参照した。

下式横穴墓や全国に広く分布する横穴墓が混在する。風土記の丘第1号として古墳群の保存・活用の目的とともに静かな環境を維持するために整備され、昭和44（1969）年にオープンした。

昭和43（1968）年に設置された西都原資料館を前身とする、宮崎県立西都原考古博物館は、風土記の丘の中心施設として、平成16（2004）年4月に開館した。古墳群と一体となったフィールド・ミュージアムとして、調査研究、史跡の保存整備、資料の収集・保管・展示、国際交流など様々な活動を行っている。博物館の近くには「古代生活体験館」があり、もの作りをとおして古代人の知恵と技術を体験できる多くのメニューが用意されている。

風土記の丘内には、「西都原ガイダンスセンターこのはな館」が設置されていて、レストラン、物産販売など様々なサービスを行っている。

博物館の展示見学後、西都原古墳群内の古墳などを見て回った。広大な園内に点在一場所によっては集中一する前方後円墳をはじめとした古墳の墳丘を見るだけでなく、13号墳では埋葬施設の粘土槨を（図11）、鬼の岩屋古墳では埋葬施設の横穴式石室を見学できたり、4号地下式横穴墓の内部をモニター操作で見学できたりもする。園内には現在地や古墳などの場所がわかる案内板が随所に配置され、また、主な古墳などには解説板が配置されていて、訪問者にとって便利かつ有用であると思われる。園内は、四季折々の花を楽しむことでも知られている。春は菜の花、夏はヒマワリ、秋はコスモスに覆われるということで、それを目当てに訪れる人も多い。

#### 4. 地方の史跡・遺跡活用の活性化に有効と思われる要素

風土記の丘やそれを前身とする施設は、古墳とその出土品を中心に構成されたもの、山岳信仰を中心に構成されたもの、城郭を中心に構成されたもの、いくつかの文化財が混合したものなど、ベースとなる資源の種類や組み合わせは多岐にわたるが、いずれも博物館の資料と近隣に位置する遺跡や史跡といった文化財とが様々な形で結び付けられ活用されていた。もとより、風土記の丘がベースとする文化財は、国の史跡や特別史跡であることが多く、運営も県レベルが基本である。組織や財政の規模は比較的大きいと考

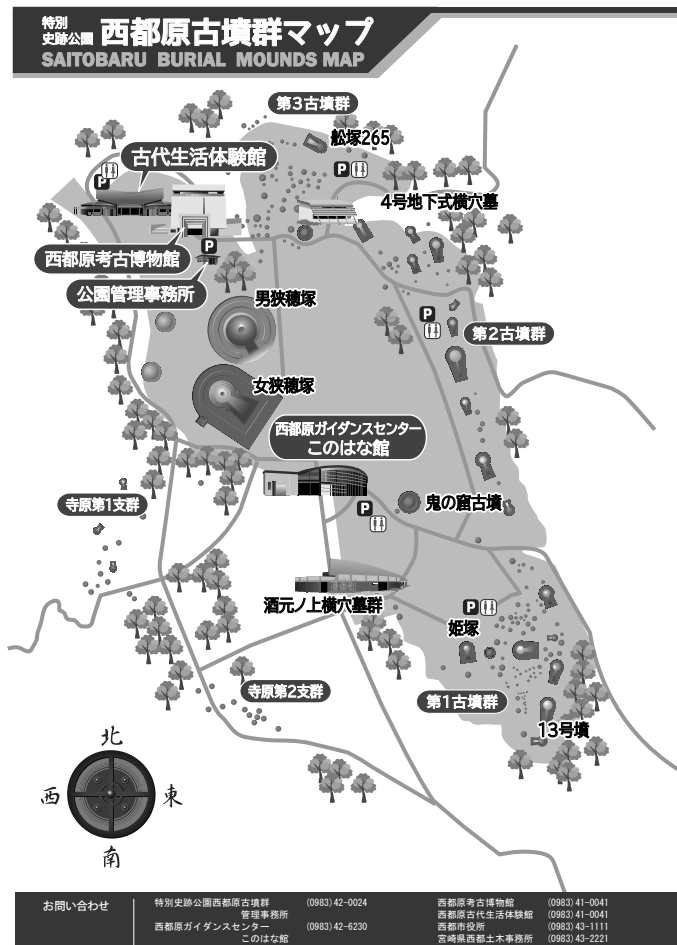


図10 西都原古墳群マップ

(<https://mppf.or.jp/wpsys/wp-content/themes/mppf/docs/saito/parkMap.pdf> よりダウンロード)



図11 西都原13号墳の埋葬施設

えられることから、地方の文化財を活かす際には、風土記の丘で行われているようなことをそのまま取り入れることはできない。しかし、取り入れたり、参考にできることも多いと思われる。

今回の風土記の丘訪問で認識できた、活性化に有効な要素として以下のものなどを考えた。

### 博物館（資料館）の役割は重要

博物館の展示や解説は、風土記の丘の史跡や遺跡といった文化財を理解するうえで、大きな役割を果たしていることが実感できた。地方の文化財活用の活性化にも、博物館（資料館）の活用が重要だと思われる。史跡や遺跡と結びつけるという役割を果たすならば、どのような施設であっても問題ないと考えている。

### 史跡や遺跡といった文化財の知名度が高い

知名度が高い文化財は人を引き寄せる力が当然強い。風土記の丘は知名度が高い文化財をベースとしているが、地方の場合は知名度のある文化財に恵まれているとは限らない。それでも、無名かもしれない文化財の知名度を高めるための方法はいろいろあると思われ、高めるための活動が続けることが必要となろう。

### 復元された遺構がある

復元された遺構は、やはり人を引き寄せる力があると思われる。吉備路風土記の丘の江戸時代に再建された五重塔や、肥後古代の森の鞠智城跡の復元建物群は見ごたえがあったし、訪れる人の数も多かった。何でも復元すればよいということはもちろんないが、復元、つまりある程度具体的なイメージを見学者が得られることは、遺跡活用活性化のために必要だと思われる。

### 体験できること

風土記の丘のほとんどが、様々なものづくりなどの体験メニューを用意していたし、これは風土記の丘に限ったことではなく、多くの博物館などでも行われている。体験は見学とは違った満足感や充実感をもたらしてくれると思われ、その効果が重視されているからでもあろう。地方の文化財の活用においても取り入れることはそれほど難しくないと考える。その場合、史跡や遺跡の特徴を活かした、他にはあまり例のない体験メニューであれば、いっそう効果的であろう。

### AR や VR の活用

AR や VR を活用した端末やコンテンツの提供が増えてきている。宇佐風土記の丘でも端末の貸し出しを行っており、古墳の墳丘の映像を楽しむことができた。遺構の復元がなされていない遺跡でも、ARによって当時の様子を復元した住居などを映し出したりすることができれば、遺跡の説明がわかりやすくなり、遺跡の魅力も増すと思われる。しかし、精巧なコンテンツの制作は現時点ではまだ容易ではないかもしれない。

### サイクリングロードの整備やレンタサイクル

吉備路風土記の丘や八雲立つ風土記の丘では、自転車がとても役に立った。吉備路風土記の丘はサイクリングロードの整備も行き届いていて、主要な史跡や遺跡にはサイクリングロードを通って行くことができ、たいへん便利だった。地方の史跡や遺跡を活用する際、複数の遺跡を含む場合は、自転車を移動の手段にすることは有効であると考えられる。その際には、案内の標識を適切に設置することが大切である。

### 市民による利用が盛ん（ウォーキング）

紀伊風土記の丘のように、ウォーキングでにぎわう場所もあった。市街地に近くである程度広さがある遺跡や史跡では、ウォーキングコースの整備は利用者の増加に結びつくのかもしれない。遺跡や史跡が直接の目的ではなくても、結果的に遺跡や史跡の活性化につながるのであれば考慮すべきと考える。

### 整備への市民の参画

紀伊風土記の丘で紹介したように、市民が遺跡の整備に関わるということも広く行われるようになっていく（黒崎2005）。文化財と関わったということが、さらに新しい関りにつながっていくことが予想され、実践を考慮すべきだと考えている。

### オリジナルのミュージアムグッズ

宇佐風土記の丘では館蔵品や風土記の丘内の鶴見古墳出土品のカプセルトイが販売されていた。八雲立つ風土記の丘では、風土記の丘遺跡ラリーでの遺跡巡りの景品として、オリジナルのカードを用意していた。オリジナルのグッズは希少価値が高いため、興味のある人にとっては大きな魅力になると思われる。

### その他の施設がある

運動公園が隣接する事例や物産館が園内に設置された事例などがあつた。また、四季折々の花を楽しむことができる風土記の丘もあつた。様々な施設などがあることが、来園のきっかけになったり、相乗効果が見込まれたりするため、文化財保護の妨げにならない、あるいは景観を損なわない範囲で、その他の施設などを設けることは検討すべきことと思われる。

## 5. おわりに

本稿では、地方の文化財活用の活性化を目指すため、西日本に所在する風土記の丘の事例を調べ、活性化に有効と思われるポイントについて述べた。いくつかの方法を指摘したが、これらのことを実際に行うためには、「人の力」が必要となる。結局のところ、文化財活用の活性化にもっとも重要な要素は、「人の力」ということになるのかもしれない。「人の力」にはもちろん一般の市民も含まれ、一般市民を中心とした地域の人材活用が大きな鍵になると思われる。

今後は、本稿で触れることができなかった、東日本に所在する風土記の丘にも訪れて調査し、そこでの取り組みも踏まえて、鹿児島県の史跡・遺跡といった文化財の活用を活性化するための方法についての研究をさらに進めたい。

### 謝辞

本研究は、令和2～3年度、鹿児島国際大学附置地域総合研究所共同研究プロジェクトの助成を受けて実施したものである。

### 文献

青木 豊 (2014), 「遺跡博物館成立への制度と思想—保存史跡に求められる『風土記の丘』理念—」, 『國學院大學大學院紀要—文学研究科—』第45輯, (135)–(154)。

小笠原好彦(2008),「風土記の丘構想を再考する」,『明日への文化財』60号, 1-22。

黒崎 直(2005),「交流し発信する遺跡 もっと身近な存在になるために」,『文化遺産の世界』Vol.17, 15-17。

鈴木重治(1976),「風土記の丘」,『ジュリスト増刊総合特集4 開発と保全—自然・文化財・歴史的環境』302-303, 有斐閣。

関 俊明(2014),「『風土記の丘』構想の再検討から学ぶ」,『國學院大學 博物館學紀要』第38輯, 25-44。

高橋誠一(1981),「風土記の丘」,『地理』第26巻第11号, 18-23。

萩野谷正宏(2018),「古墳を舞台としたワークショップの実践—前山 A58号墳埴輪設置式・完成記念セレモニー開催報告—」,『紀伊風土記の丘 年報』第46号, 38-43。

文化庁文化財保護部記念物課(1987),「『風土記の丘』及び『歴史の道』について」,『文部時報』第1329号, 59-68。

安原啓示(1969),「風土記の丘計画の現況」,『月刊文化財』第74号, 46-47。

安原啓示(1976),「風土記の丘の現状と将来」,『博物館研究』Vol.11 No.8, 2-6。

安原啓示(1979),「風土記の丘」『文化財保護の実務(上)』776-790, 柏書房。

全国風土記の丘協議会(2018)『ガイドブック につぼん風土記の旅』。